

## 『首書源氏物語』桐壺卷頭注の翻刻と小考察(下)

—— 「或抄」の性格に関して ——

安 道 百合子

### はじめに

本稿は、『首書源氏物語 桐壺』(和泉書院・寛文十三年刊本・大阪女子大学付属図書館蔵本の影印複製<sup>1)</sup>)の後半を翻刻したものである。あわせて、前稿<sup>2)</sup>にひきつづき、引用注のうち「或抄」の性格に関する気付きをまとめておきたい。翻字方針は、前稿と同様とする。後半は、19丁表の239番から示す。

### 一、『首書源氏物語 桐壺』後半の頭注の翻刻

239 ○月日へて【細】いみの日数あく心にや

240 ○此世の物ならず【或抄】天人などのやうに思召と也

241 ○いと、ゆゝしう【万水】若宮のあまりにきとくなる御形も／中  
く、ゆく末あやししく心もとなきとの心也あまりの事に／かやうに  
おほしめすなるへし

242 ○坊さたまり 朱雀院春宮坊に立給也立皇太子例／河委【細】醜

翻御代には東宮文彦太子保明薨給／の後其子慶頼王立坊又早世其  
後朱雀院立坊也【弄】東宮を辞し給例有

243 ○いと引こさまほしう【万水】是は源氏君を朱雀院よりも／こして  
東宮にたて申たきとの御門の御心也

244 ○さはかりおほしたれと【万水】源氏を坊にと天子もお／ほしめし  
世中の人も心もとなく思ひ奉るにされとも順義／にまかせて朱雀  
院のさたまり給事殊勝の義なるへし

245 ○御心おちる【細】女御の心案堵せし也

246 ○おは北の方【河】おぼとは祖母をいへり若紫巻にも／有云々拾遺  
第九源重之母の近江のこうに侍り」19才

けるにむまこの東よりのほりていそく事とてえこの／度はあはて  
のほりぬる事といひて侍りければおほの／よみける おやの親と  
おもはましかはとひてまし／我子のこにはあらぬなるへし

247 ○おはすらん所にたに【万水】母君の更衣のおはします所へ／ゆか  
んと常にねかひ給るしにやつるにうせ給也

248 ○此たひはおほしりて【細】源氏君更衣にわかれ給時は／何のわ

きまへもなかりしを此たひは思ひしりて愁／傷ある也

249 ○年ころなれむつひ【或抄】是より母君の臨終にいひ／し詞也若宮へなれむつふれし也 睦ムツフル

250 ○今は内におみ【或抄】源氏御成人ゆへ禁中におはし／ます也

251 ○御文はしめ【河】皇子七歳御書始例村上天皇親王時／承平二年二月廿二日一条院寛平二年十二月八日【花】御書始ニハ御註孝経或貞觀政要ヲ讀始給也／博士讀云御註孝経序五字尚復云此許次尚復讀」19ウ

五字如先皇太子親王等の書始に聊替事尤有也

252 ○らうたうし給へ【孟】ねんころにとの心也御門の弘／徽殿への御詞也

253 ○わたらせ給御ともには【万水】天子の御ともには源氏をつれ／給也源氏おさなくましませはみすの内へいれ奉給と也

254 ○いみしきものゝふ【或抄】英雄の武士を云河委／敵アタ仇同怨同

255 ○女みこたち二ところ【細】朱雀院の御一腹也【万水】一人は齋院に立給ひ一人は一品宮と申也いつれも／こきてんの御はら也

256 ○御かたゝも【万水】女みこ二所の事也御連枝なれとも／貴人はかくれ給もの也されとも源氏にはかくれ給はぬと也【或抄】御方ゝといふは御連枝に不可限女御更衣たちの事／なるへし下の詞にたれもゝと有もおなし」20才

257 ○今よりなまめかしう【河】最媚ナマメク又生日本紀／【花】委所によりて心かはる也

258 ○うちとけぬあそひくさに【万水】源氏のさまさすか／やはらかなる物の又はつかしき所あれば人皆打とけぬと也

259 ○わさとの御かくもんは【或抄】御学文はいふに不及琴笛の／道も御きよらなると也

260 ○雲井をひゝかし【孟】徹天の樂の心也云々

261 ○すへていひつゝけは【万水】源氏の事をあまりにほめ／奉らはそらことゝ人のおもはんとの心也

262 ○こまうと【巴抄】高麗人也相人は人相を見る人也

263 ○宇多の御門の【河】寛平遺誠云外蕃之人必／可占見者有簾中見之不／可直對一耳／河海には此本文あはさるよしをいへり【花】鳥必めし給／はてかなはさる時にはと積せり

264 ○ころろくはん【河】鴻臚館は玄蕃寮にあり仍此寮／頭鴻臚卿号玄遠也蕃藩也遠藩ヨリ」20ウ

来朝ノ客ヲ擁スル所也此館延暦遷都之始東西ノ大宮被レ置レ之而弘仁以東鴻臚館為東寺賜弘法大師以西鴻臚館為西寺賜修同僧都其後七条朱雀ニ鴻臚館ヲ立テ置三韓館下略

【花】職員令の玄蕃寮をは訓に法師まらうとのつかさと／よめり玄は僧蕃は客也僧尼と云ものも昔百済国より／来朝せし故に蕃客とおなしく此寮につかさとる也又／鴻臚の臚は腹の前を臚といふ。鴻のなく時声を出す／所也故に鴻臚は声を傳ると云心也異国の人来朝の時は／通事といふつかさありて両国の志を傳る故也【細】今の四つかと云所の邊也

265 ○国のおやとなりて【万水】国親国母と云事あればなるへし【花】鳥【弄花】万水等の諸抄説々有【細流】云国のおや／と成て是等の段花鳥の義いか／はしめより国の親／となりてあらはあしかるへし天下をたすくるかたにてあらは／みたれうれふる方たかひて

よかるへしと也

266 ○大やけのかため【或抄】撰政関白天下輔佐の臣下のかた／にては也

267 ○さへかしこきはかせ【河】博士才伎才伎 猶河委／【万水】右大弁も才学ある人と也／【或抄】本朝文粹に鴻臚館の佐とて多くのせたり／此物語に引用に不及也」21才

268 ○けうありける【万水】興なるへし

269 ○文なと【万水】文とは詩の事をいへる也／【或抄】文とは詩文の事也

270 ○かくありかたき人に【万水】こまうとの詩に源氏君に／あひ奉りて却而かなしかるへき心はへをつくる也

271 ○みこもいと哀なる句を【万水】源氏君も哀なる詩を／つくり給へるにこまうとのめて奉と也／【河】感情メテマフコ、ロ日本紀

272 ○いみしきをくり物とも【万水】こまう人の源氏にさ／くる物也【弄】梅枝巻に此進物の沙汰あり

273 ○ことひろりて【或抄】隠密も自然にもれたる也

274 ○春宮のおほちおと／【万水】弘徽殿の父右大臣の事／也朱雀院の御祖父也【或抄】もし東宮をたてかへ／やし給はんすらんと心もとなかり給也」21才

275 ○やまとさうを【細】和国の相人もかやうに申也／【花】藤原仲直か光孝天皇を相し奉廉平か高／明公を相せしはみなやまとさう也【万水】まへに大和の／相人におほせて源氏を相せさせ給そのすめを／たかへしと御遠慮なるへし【巴抄】おほせては課字也／課試及第といひ課役といふ皆物をあつらゆる也さて／課はこゝろむる

とよむ間大和相に心みせ給と也

276 ○さう人はまことに【万水】高麗人の事を思召あはせ／給也其故は御門の御心と相人の申とかはらねはかやうに／おほしめす也

277 ○無品親王の【花】親王は一品より四品までは有品也／五品にあたるを五品とはいはず無品と云也童体の／時親王宣下あるは必無品也下略花委

278 ○外戚の【或抄】げしやくとよむへし又げさくとも母方の／事也【万水】源氏の御母方によせおもき人なければ御心に／もなし給はぬはいとかしこき御心をきてと也よせなき／とは無縁の義也【或抄】水尾帝と惟喬の事をひけり

279 ○いよ／＼道／＼の【弄】天下をたすくへき人は博学なら／てはあしかるへき由見えたり無学行無学行政如無学行灯夜行無学行／又人不無学行学不無学行知無学行道とも思り

280 ○きはことに【孟】一段と、云心也」22才

281 ○あたらしけれと【或抄】あたら物と云心也可惜アツク万葉

282 ○みこと成給ひなは【万水】源氏を儲君などになし／給はんかと世中の人うたかひ申へきと也

283 ○すくようの【河】宿曜廿八宿九曜の行度を以て／人の運命をかんかうるゆへ也【万水】天文道の博士の／事といへりと云々／【弄】宿曜道北斗道の法師也／【或抄】昔は陰陽師宿曜師とて相並でありしか近代／断絶ト云々弘法掃朝の時渡ると也

284 ○源氏になし【花】嵯峨天皇弘仁五年に男女都て卅人に／源氏の姓を給是源氏の始也又醍醐の御子高明公は元／服已前に源氏の姓を給六条院は其例なるへし河委

- 285 ○年月にそへて【万水】是は更衣の事也更衣みやす／所おなし事也  
まへにするす
- 286 ○さるへき人／【万水】更衣のことくおほしめす人かあらんと／  
しかるへき人／を御門へまいらせらるゝと也／【或抄】更衣のな  
げきをなくさめやすると也
- 287 ○せんだい【河】此先帝相当光孝天皇歟 典侍詞にも／三代の宮つ  
かへとあり光孝宇多醍醐たるへき歟河委」22ウ
- 【細】先帝系図なし【或抄】四宮後に藤壺と申也
- 288 ○母后【或抄】藤壺の御母后也系図なし先帝后也
- 289 ○うへにさふらふ【万水】禁中にある古老の女房なるへし
- 290 ○かの宮にも【万水】四宮の御方なるへし
- 291 ○ほの見奉りて【河】尚書側見月
- 292 ○三代の宮つかへに【細】河海には光孝宇多醍醐かとあり然而さ  
して三代にてなくともたゞ久しくと／いはんためか弄同
- 293 ○きさいの宮の【或抄】先帝の後腹の妹宮と也
- 294 ○いとようおほえて【或抄】おほえてとはよく似たると云／心也常  
の物をおほゆると云にはかはるへし」23才
- 295 ○かたち人【弄】かたちよき人をいへり
- 296 ○ねんころに聞えさせ【万水】内侍介して念比に藤壺の母后の  
かへ入内させ申されよとの給也
- 297 ○春宮の女御の【或抄】春宮の母女御と云事也こきてん／の女御也
- 298 ○さかなく【或抄】悪字也俗に口さかなきなど云に同じ
- 299 ○あらはにはかなく【或抄】更衣はこきてんの女御のねた／みにて  
おほくはやまひつきてうせ給たる也
- 300 ○ゆゝしう【細】いま／しき也
- 301 ○すか／しう【或抄】速々也早速の心也
- 302 ○后もうせ給ぬ【万水】藤壺の母后逝去し給也
- 303 ○心ほそきさまにて【万水】四宮のさまをいへり
- 304 ○たゝわか女みこたちと【万水】御門の姫宮たちとお／なしやうに  
おほしめすへきよしおほせ事也／【或抄】つらは列也」23ウ
- 305 ○さふらふ人／【或抄】藤壺御かいしやくの女房たち也／御うし  
ろみは乳母など也
- 306 ○御せうと【河】兄をせうとゝいひあねをいもうとゝいふ定め  
る事也此兵部卿宮も藤壺の御兄也／【万水】後には式部卿宮と申也  
紫上の父宮也
- 307 ○藤壺【或抄】飛香舎におはします也
- 308 ○あやしきまでそ【万水】更衣に似給と也／【或抄】似るへきゆへな  
き更衣に似給たるをあやしきといへり
- 309 ○これは人のきは【細】桐壺の更衣は族姓さしもなきに／よりて人  
もそねみしに是は族姓人からそねみいふへき／かたなしと也
- 310 ○うけはりて【河】承諾の心也受張相當の心にあ／【巴抄】諾字領状す  
る心也もつてひらくなと云心も有也」24才
- 311 ○かれは人も【孟】更衣の事也／【万水】世上の人此藤壺のやうには  
ゆるさゝりしと也
- 312 ○おほしまきるとは【細】おもしろきさま也／【或抄】更衣をわ  
すれ給にてはなけれと更衣に似給たる／ゆへに自然に御心うつる  
也。
- 313 ○こよなく【河】無此世 無越 閑雅 是は幽玄の義也／八雲抄云うるせ

く物のまさりたるなという躰也又さ衣／はるかにと云心にいへり源氏には又ことの外也よく／見る／にことの外也

314 ○おほしなくさむ【弄】此詞尤餘情あり哀なる心也云々

315 ○しけくわたらせ給【万水】藤壺の御方也／【或抄】藤壺にかきらすしけく渡御ある御方／也

316 ○いつれの御方も【万水】いつれの女御更衣も我おとらしと／いとみ給へれと御年はたけ給に此藤壺はわかうつく／しくおほしますと也」24ウ

317 ○せちにかくれ【或抄】切也ねんころ也／【万水】藤壺は源氏君にせちにかくれ給へともをのつ／から自然の時は源氏の御らんすと也

318 ○かけたにおほえ給はず【細】源氏君は更衣のおもかけは／おほえ給はねとも今内侍介のかたり給につけてなつかし／く思給と也【花】後撰引なき人のかけたに見えぬ／やり水のそこはなみたをなかししてそこし

319 ○なつさひ【河】昵近【孟】なれむつふ心也

320 ○うへもかきりなき【弄】藤壺をも光君をも切におほし／めすゆへにおほせらるゝ心也／【河】其ドチ万葉疏ウトンス史記外人白氏文集

321 ○あやくよそへ【万水】藤つほは更衣に似給との心也／【或抄】更衣によく似給たれは源氏の御母ともいふへき心ち／し給と也

322 ○なめしと【河】輕ナメシ日本紀無礼新撰万葉滑知字／【万水】常にびろうなるなといふ心也【或抄】無礼の心也

323 ○つらつきまみな【万水】更衣に藤つほの似給へるゆへに」25オ  
又源氏君も藤壺に似給との義也此一段は御門の御心に／源氏君と

藤壺と思召あひ給へといひきかせ給御詞なるへし

324 ○にけなからす【河】無似氣ニケナ／【或抄】此詞は似あはぬにはあらずといふ心也

325 ○御中そは／しき【或抄】側々敷也まほならぬ心也／【万水】こきてん女御又藤壺をも十分におほしめさぬ也／【細】更衣の後は源氏をはゆるし給ひしを此藤壺と／御中へたて給はぬにより立かへり源氏をにくみ給と也

326 ○名たかうおはする【万水】こきてんの宮たちよりも源氏／の君はうつくしけなるとの義也／【弄】こきてんの宮たちの事をいふ」25ウ

327 ○ひかる君と【河】亭子院第四皇子敦慶親王号玉光／宮好色無双の美人也河委／【或抄】源氏と藤壺との御威光をとりならへていふ也

328 ○かゝやくひの宮【河】中宮彰子御堂女上東門院のまいらせ給し／おりにてかゝやく藤壺と世の人申けれ榮花物語花同／皇女人内事昌子内親王朱雀院御女

329 ○此君の御わらはすかた【河】人生て十二を一周といふ／此歲冠礼する和漢の例也禮記云天子之子十二而冠／十二にて元服之例河海委依繁多略之

330 ○ゐたち【河】居起也【万水】たちるをいひかへたる也

331 ○かきりある事に【万水】源氏君の御元服などは春宮の／やうには有ましき法度なれとも光君を奔走し給／ゆへに事にことをそへさせ給との義也

332 ○春宮の御元服 河委【万水】南殿は紫宸殿を／申也其外の皇子は

清涼殿にてある法也

333 ○おとさせ給はず【万水】東宮の御元服におとらすせさ／せ給ふと也

334 ○ところ／＼のきやう【万水】所々の饗などを内蔵寮／穀倉院よりとりおこなふ也【或抄】内蔵寮は金銀珠／玉錦綾を司とり御眼を奉行する所也云々／穀倉院二条南朱雀西朱雀門の前にあり諸国の

米を納也云々

335 ○おほやけ事に【或抄】公役のやうに有てはをろそか／ならんと思召て別而勅を下して念を入させらるゝ也

336 ○きよら【或抄】清字也【万水】結構の義也

337 ○おはします殿【河】清涼殿東庇也建曆御記／見えたり河花委

338 ○いしたてゝ【和秘抄】椅子とは主上の御腰をかけ給物也【花】一世源氏元服の次第西宮抄をひけり花委／【万水】親王元服の時ひ

るのおましを徹して大床子二脚／をたてゝ出給あり源氏の元服には殿上の椅子をうつ／さるゝ也花鳥ニ云今も小朝拜などの時は六位藏人二人／殿上の御椅子をかきて是を立る事あり西宮抄に天王／御侍椅子と有殿上の御椅子をうつさるゝと見えたり／此物語の心と相違なき也

339 ○ひきいれのおとゝの【万水】引入の大臣とはゑほしおやの事也／葵上の父左大臣也【和秘抄】加冠の人也

340 ○大藏卿藏人【万水】家々の説に此詞は兩人といへり当流／には一人と心うへき也下の詞にきよなる御くしをそく程／とあれは理髪の人と見えたりしかれば藏人頭か大藏／卿を兼官したる也藏人

頭の大藏卿なるへし又大藏卿／の藏人とも云へし代々理髪大藏卿例也河説同」26ウ

341 ○心つよくねんし【或抄】祝義の折ふしゆへかなしからぬ／躰をし給也

342 ○御やすん所に【花】冠者体所也康保二年八月御記ニ云／下侍東第一間旋立屏風其中敷玉鋪一牧筒一牧／兼用本家為親王猶し衣所花委

343 ○御そ奉りかへて【万水】元服已前は赤色の袍のわき／ぬはぬを着し給へり元服已後ハ脇をぬひて黄なる／袍を奉りかふる也又浅黄ともいへり猶花委

344 ○おりてはいし【細】東宮の御元服は南殿にて堂上にて／拜あり是は堂下にてある故に皆泪おとすといふ義／ありされともたゝ源氏の容儀進退を感じるころ／しかるへき敷【万水】親王已下の元服拜舞ハ清涼殿の／東の庭にて御前にむきてあり万水委

345 ○きひはなる【河】種日本紀【巴抄】いとけなき心也

346 ○あけおとり【花】わらははにて見るめよき人のかうふり／して見おとりするをいふ也

347 ○うつくしけき【河】愛常万葉」27オ

348 ○みこはらに【河】葵上母桐壺帝妹也仍御子腹と云也／致仕大臣なとも宮はらの中将といへり うつほの藤原君／一世の源氏にて才能世にすぐれたりしかは時の太政大臣の／ひとりむすめに御かうふりし給ひし夜むこにとりて／かきりなくいたはりてすませ奉り給

349 ○春宮より御けしき【万水】朱雀院より葵上に入内あれ／との給ひ

し也【弄】さかきの巻に此心見えたり

350 ○おほしわつらふこと【万水】左大臣の心に源氏をむこにと／のそみ給ゆへ也

351 ○内にも御けしき【万水】左大臣内々御門へも源氏を聲にとり申たきよし奏せられたる也

352 ○さらは此おりの【万水】御門御領掌の義也／【河】横陳ソヒツ元服夜嫁娶の例河あり

353 ○さおほしたり【万水】左大臣の同心申されたる心也

354 ○さふらひに【万水】さふらひとは殿上をいふ是によりて殿上人／をは御さふらひと哥にもよめり又侍臣ともいふ也源氏の御／元服は清涼殿にてありて其後御遊は殿上にてと見えたり／猶種々の義花鳥に見ゆ【河】建曆御記をひけり

355 ○おほみき【河】御酒日本紀 酒同 猶河委 27ウ

356 ○おとゞけしきはみ【万水】左大臣の源氏に葵上の事を／されことにはのめかし給事をいへり源氏のわかおほします／によりてはち給てともかくもえあひしらひ給はぬよし也／【或抄】源氏は今無位の人なれば此間のことくに親王の列／にはあるまじき事と也是称名院仍寛今案のよし也巴抄同

357 ○内侍せんし【河】内侍宣の事蔵人奉勅宣下事也下略／【万水】御遊盃酒は殿上にてあかて引入の大臣はさらに／御せんにめして御盃給はるへき由を内侍傳へたると也下略／花鳥義同之猶花委

358 ○うへの命婦【弄】内命婦外命婦とて有内裏に伺候／するを内命婦といふそれを上命婦と云へし外命婦は／臣下の妻也【河】うへの女房なといふさま也

359 ○白き大うちき【河】白大樹一領親王元服加冠祿／白大樹天皇御元

服御衣一領也一説樹有大小着衣／上云々うはきの上に樹をきる也色かさねはきぬにしたかふ／長さは小袖とひとし中へらうあり

【花】白大樹に女房のきぬ／一領そへて加冠の祿に給也諸抄委【弄】樹はきぬの事也／それに大小あり小樹は女房ならては着せぬ也

360 ○いとなき哥 御門の御哥也【花】長き世を契る心は／宮はらの御女を源氏君の御そひふしにさため給也下の詞に／御心はへ有ておとろかさせ給とあるは此事なるへし 28才

361 ○むすひつる哥 左大臣也【細】紫は総而女をいふ又は今は／元服なれば也哥の心は源氏君の御心たにたかはすはと也／八雲抄色のかはりそんしたるをあせたるといへり／拾遺引ゆひそむる初もとゆひのこ紫衣の色にうつれとそ／おもふ元服の日より紫の糸をもとゆひにする也万水委

362 ○長はしより【河】長階【花】長はしと云は御殿より南殿へ／かよふ廊也大内の時は此所にきさはし有て東の庭に／おる、道あり引入大臣なとも此階よりくたりて御前の／たつみの方にて御前へむきて舞踏侍るへし

363 ○左のつかさの 左馬寮の御馬也

364 ○蔵人所のたか 鷹は蔵人所の所掌也【花】委動例有／【弄】蔵人所禁中仙洞執柄家にもあり殿上の次の間に／布障子をたて、蔵人所と云也地下の者の候する所也

365 ○みはしのもとに【弄】問云引入大臣の外祿を給事例有歟／答云源氏君の元服に祿を給事は東宮の御元服の／時の義を表する也其時は諸卿こと／／給也云々

366 ○おりひつ物こ物【花】折櫃物献物也献物は惣名也元服の人の奉物也其中に籠に入たるをは籠物といふ又折櫃に／もりたるもあり猶花委一世源氏元服の時は献物などは／なき也親王の時の例を以て右大弁承て用意するにや云々

367 ○とんしき【河】屯食つゝみいひと云物也下臈に給飯也云々／河委【花】屯食は元服の人の本家より諸陣の役者に／わかち給もの也花委

368 ○ろくのからひつ【花】禄辛櫃は親王居已下の元服には是を」28ウたてす東宮の御元服の時の事也さて下の詞に東宮の御元服に数まさりていかめしく有ける由をのせ侍り

369 ○ゆゝしう【細】此ゆゝしきはゆへゝしき心歎

370 ○女君はすこし 葵上十六源氏十二也／【細】葵上は源氏に四のこのかみ也此年のましたる事／故始終葵上は心をかせ給と也

371 ○にけなく【万水】源氏と葵上の御歳につかはしからぬと／の事なり

372 ○此おとゝの【孟】左大臣関白なるへし葵上父也

373 ○母宮うちの【万水】葵上の母は御門と一腹の御／いもうとの事をいへり」29オ

374 ○此君さへ【万水】源氏をさへ左大臣智にとり給と也

375 ○右のおとゝの【万水】弘徽殿の父右大臣は朱雀院の御祖父との義也／【或抄】朱雀院御代には摂政し給へき人と也

376 ○くらとの少将【万水】葵上の舎兄也後に頭中将と／申也源氏と御中よかりし也【細】後に致仕大臣也／執柄家藏人少将の例河委

377 ○右のおとゝの御中は【万水】左大臣と右大臣の御中はよ／からぬ

とも御子の少将をむこにとり給て四の君に／あはせ給と也

378 ○おとらすかしつき【万水】左大臣に源氏君をかし／つき給におとらす右大臣も藏人少将をかしつき給也」29ウ

379 ○さとすみも【或抄】御門の御まへさらすおはしま／すゆへに禁中かちにおはします也

380 ○おほいとゝの君【万水】葵上の事也かなの文字に／おほいとゝもかけりおほいとゝよむへし又太政大臣をは／おほきおほいとゝよむへし

381 ○おさなきほと【万水】源氏君のおさなき心に藤壺に／御心をかけ給也

382 ○おとなに成給て【花】桐壺の巻は源氏君の十二にて元服までの事をかき侍れと此詞にて十二より後」30オ

の事をふくませて申侍り筈木とのあはひ十三より十五の年までの事はかけたるやうなれと此一段の詞の中にこもりて侍るへしへゝのやうには藤壺の簾中へもいれ申されぬ也

383 ○ありしやうにみすの内にも【万水】源氏おとなしく成／給てはま

384 ○ほのかなる御こゑを【万水】藤壺の御声の事也

385 ○五六日【孟】いつかむゆかとよむへし二三日も同上／日の字入てよむへし

386 ○たゝ今はおさなきほとに【万水】源氏君葵上にうと／うとしくおはしませともいまたおさなくおはしませは／とかを見ゆるし給て猶もかしつき給と也

387 ○御方ゝの人ゝ【万水】葵上にさふらふと源氏の御方に／めしつかはるゝ女房たちとをえりとゝのへ給と也」30ウ



388 ○おほな〜【万水】ねんころなると云心也伊勢物語にはあふ／な

〜とありそれも心はひとしき也いたつくとはいたはる／心なる  
へし【細】ねんころに也【河】イカル煩又かしつく／心にもあるにや

389 ○内にはもとの【万水】禁中にては源氏の母御息所の住／給ひし桐  
壺に光君はおはします也それをもとの淑／景舎と云り内裏のうし  
とらにあたりさうしとは／つほねといふ心也

390 ○里のとは【万水】是は源氏の祖母君の住給ひし所也／後に二条  
院といふ也【花】菜花物語かくて大殿十五の／宮のすませ給ひし二  
条院をいみしくつくらせ給てもと／よりおもしろき所を御心のゆ  
くかきり見かゝせ給へはと云々／今案法興院は二条京極にありも  
とは二条院と号せる／を正暦三年に法興院とは名をかへられたる  
也源氏の／御里の二条院は是になすらふへきにや

391 ○すりしき【或抄】修理かたの司を修理職と云也今／の世にもある  
也

392 ○たくみつかさ【或抄】内匠寮也【和秘抄】是はみな造／作のかたを  
つかさとするもの也

393 ○になう【万水】第一にと云心也【河】無二

394 ○池の心ひろく【河】棲額題二鳩鶴一池心浴二鳳凰一自氏文集／苔生石  
面二輕衣短荷出一池心二小蓋疎朗詠一散めとも影をやとめん藤の花池  
の心そ有かひもなき躬恒

395 ○おもふやうならん人を【弄】二の心ありたゝ大方思ふやう【31オ  
ならん人】と思ひ給と又藤壺の事とを心かけ／ての給也

396 ○ひかる君といふ名は【万水】是は高麗の相人源氏の御形／のひか  
ることくなるにめて奉りて光君とは名付奉る／との註の詞也【細】

源氏の名の事をかきあらはせり／西三条右大臣源光といふは仁明  
天皇の御子才人也

397 ○いひつたへたるとなん【細】紫式部わかきたる事を／人にしら  
せしと也いづれの巻にも此心あり／【万水】此詞奇妙也元来よりあ  
る事のやうに書なし／てさすか又此巻の初のことくおほめきてか  
きはたし／たる所類なきもの也【31ウ

## 二、「或抄」注の性格について

前稿において、先行研究を紹介し、「或抄」の注については、  
三条西家の注釈の流れを汲むとする立場と、松永貞徳の注釈態度  
に近いとする立場との相反する二つの立場があることを示した。  
そのうえで、「或抄」の注本文と一致する注が本居宣長の『源氏  
物語玉の小櫛』に存することを指摘した。それは、宣長が、同じ  
説であれば古いほうを引用するという基本態度を明示しているに  
もかわらず、『岷江入楚』でなく、「或抄」から引用した注があ  
り、かつ、その注本文には『首書源氏物語』の「或抄」と同じ本  
文があることを示すためであった。つまり、『岷江入楚』とは別  
の「或抄」と呼ばれる注釈書が伝えられていた可能性があるとい  
うことである。

そこで、桐壺卷に一一七例に及ぶ引用がなされている「或抄」  
注の本文が、『岷江入楚』の注と類似するのかどうかについて、  
改めて確認してみたい。その際、『万水一露』の注と、『湖月抄』

ならびにその増補注も視野に入れておきたい。諸注集成の注釈書としては、『岷江入楚』の先駆けとして『万水一露』があり、かつ、桐壺巻では、先行注のなかでもっとも多く『万水一露』が引用されている(137例)。また、本書が、源氏物語本文と注をとみに示した『湖月抄』の先駆けとしての意義を有するのかどうかにも、いづれ考察を及ぼしたいからである。以下、『岷江入楚』を『岷』と、『万水一露』を『万』と、また『首書源氏物語』を『首書』と略す。

#### ①独自の視点が見える注

注番号26「玉のおのこみこさへ」項には、「此さへおもしろきてにをはと也。更衣のためには姫宮にても幸なるに玉のことくなる若宮をさへ」とあり、助詞「さへ」に着目したうえで、産まれた子が姫宮であった場合に比して男宮であったことの重さを加えるはたらきを読みとる。『岷』では「玉のをのこみこさへ」項に「さへの字妙也弥更衣寵有へき也玉ハ褒美ノ詞也」とあり、「姫宮にても」の視点は無い。「さへ」に着目するのは同じだが、更衣の寵愛が、男宮マデモ誕生したことによってさらに増すと説明している。

同様に、注番号100の例。『岷』には「これにつけてもにくみ給人おほかり」項に「更衣没後にさへ猶人のねたみある也」とあるが、「又心ある人は更衣のとかはなし、帝のなされやうあしきゆ

へと也」との指摘は見えない。107「のちのわさ」項に、「よろこまやかに孝養し給心」を読みとるのも、「或抄」独自の説明である。少数派の意見をあえてとりあげて説明を補足したり、行為の意味づけを加える注は、他にも見える。注113には『万』の引用のあとに「或抄」があり、女房と乳母とをそれぞれ「天子の御心やすくめしつかふ」と「源氏にもしたしきゆへある」と分けて説明を加えるが、『岷』には『万』とほぼ同じ注が見えるのみである。注118なども具体的に生前の更衣について、物語に書かれていないことを読み取って補足している。これらは、少なくとも『岷』までの諸注には見られない内容である。

また、『岷』になつてはじめて見える引歌指摘と同内容なのは注10の「あしかれと」歌である。これは『岷』では「秘」の肩付で記されており、三条西公条注『細流抄』を引いたものと見えるが、『細流抄』には存しない。また、19に引く「さもこそは」歌は『岷』を含め、それまでの注には指摘がない。この二首は、いずれも『伊勢物語集注』に見える和歌である。

#### ②人物の役割や、語りの視点を明確に示している注

注27「右大臣」項には弘徽殿女御の父であるという系図的説明に「朱雀院の御祖父」を加え、さらに「此女御をあし后といふ也」とある。また、注46の「物語の地よりいふ」、327「源氏と藤壺との御威光をとりならへていふ也」などは語りの視点に言及し

たり、語り手の意図を汲み取っている。榎本氏が「作中世界の人物やその行為に対する評価・見解がいかなるレベルあるいは立場からなされたものであるのかという点に意識的であった」と指摘されたとおりのことは桐壺巻においても見える。ただし、たとえば桐壺巻の弘徽殿女御に対して、その役割をことさら悪役として見ようとするのは、『岷』よりも『万』に色濃い。注218が引く『万』に「後に悪后と申也。源氏君をそねみ給人也」とあるなど、人物の対立構造をはっきりと示す注が存するのである。その点、『岷』はむしろ、他の女御更衣たちのうらみをもひとしなみに挙げ、源氏立坊の可能性を疑う時点で女御のうらみに言及する。あくまで物語に即して、人物の感情を説明していくわけで、少なくとも物語のはじまりの時点で、女御を悪役として断じるようなことはしない。

### ③ 平易な表現を用いた注

注39・11に「きつかひ」という語が見える。39「坊にもようせすは」項には「或抄」春宮坊也。儲君の御方の事也。ようせすとはあしくせは此源氏君の坊に給はんと弘徽殿女御のかたには御きづかひあると也。【河】ようせすは不用不能不善」とある。一方、『岷』には同項に「春宮坊也。源氏君をや春宮にたて給はむと一宮かたに思ひうたかふ也。ようせすは不用不善不能なとかけり。あしくしたらは也此」念より源氏を弘徽殿のにくみそめ給し

也。」とある。ほぼ同内容ながら、『首書』では立坊の可能性を恐れる気持ちを「きづかひある」と言い直し、『岷』はその気持ちが憎しみの発端になったと書き及ぶ。11の場合も帝の嘆きを「きづかひしてむねふたがる」と言い換えているのに対し、『岷』のほうは「いひ思へる」とあるだけで、しかしその後、「弘徽殿などには猶にくみ給也。人の性をかきわけたり」と続く。この二例などは、『或抄』が平易な言い換えのみをしているのに対し、『岷』のほうがむしろ文脈に即して物語に書かれていないことを補っているといえようか。

また注12・18の「女中のねたみ」158「思ひくたびるる」などの語彙や198「俗に口さがなきなど云に同じ」と言い換えるなど、平易な表現は一つの特徴であろう。

この傾向は、たとえば死を意味する表現において、より直截的な表現を使うことにも見える。注72「さりとも打すては」項には「御門の御詞也。死するみちなりとも我をすてはえゆかしと也」とある。この項、『岷』には「御門の御心也。此詞限ある道なりとも打いてはよもとの給也。さばかり契給へれば也。又すこしはくるしからじなど、たすけたる御詞にやと云々」とあり、『万』も「碩此詞かぎりある道なりともうちすてはよもとの給也。又いさかもくるしからじなどたすけたる御詞にや」とほぼ同文である。いずれも、死別の道を意味する道は「限りある道」とあるのみだ。下って、『湖月抄』の本文傍注には「たとひ病氣

おもくとも帝を捨てては更衣の里へえゆかれじと也」とあり、それに対して増補注『玉の小櫛』には「ゆくは死てゆく也。上の語次の歌にてしるべし。注に、里へえゆかれじと也、といへるはひがごと也」とある。わざわざ「死するみち」と直截的に書くのは、「限りある道」で理解できない読者をも視野に入れていられるかもしれない。同じく、注77にも「禁中にて人の死することはなけれど」と具体的に補う文章が見える。また、注299「わざとの御がくもんは」項に「御学文はいつに不及琴笛の道も御きよらなる也」とあるのも、『岷』の「学問はわざととりたて、し給道也。それは勿論さくすぐれたる也。さてかりそめにし給ふあそびわざもかしこきと也。」とあるのに比べると、簡潔で具体的だ。これらは、常識的な範疇でばかした言い方をしているところも、ことさらに明確に言い換えている例である。

つまり、『岷』との比較は、個々の用例に即して試みていくと、文意においてよく似ていると見受けられる場合もあるし、どちらか一方がより詳しく文脈に即して補っていると思われる場合もある。それがまた巻によっても状況が若干異なるということになり、すぐに影響関係に踏み込むのは難しいと考えざるを得ない。また、『岷』のほうが、三条西家の正統の注釈書を目指したものとすれば、地下の読みを色濃く反映する『万』とはおのずと性格を異にするものであろうが、しかし実態としては『万』の注釈内

容と同内容をかなり引き継いでいる。『首書』の場合は、『岷』の態度とは違い、典拠を明示して『細流抄』と『万』とを引用し、さらに「或抄」があるのである。

なお、「或抄」と『岷』との関わりを検討するうえで、気になる点を補足しておく。ひとつは、『岷』のなかに「或抄」という肩付を持つ注が存することである。これは、『岷』の料簡によると「此外一本アリ此内御説トアルハ称名院ノ義也」とあり、『岷』が引く先行注「河（『河海抄』）」「花（『花鳥余情』）」「弄（『弄花抄』）」「秘（『細流抄』）」「箋（三条西実枝注『山下水』）」以外の一本で、中に称名院すなわち三条西公条の説を引く書物である。

『岷』の桐壺巻にも「或抄」肩付の注は多いが、これらが、『首書』の「或抄」注と一致することはない。

いま一つは、注356の「或抄」注に見える公条の注であることをほめかす記述の存在である。356には「源氏は今無位の人なれば、此間のごとくに親王の列にはあるまじき事と也。是称名院（公条―引用者注）仍覚今案のよし也」とある。一方この部分に該当する『岷』には「箋」の肩付で

源氏無位の人なれば親王の次に着へきいはれなき故に別勅にて如此とかけるとか覚えたり。さてけしきはみ給事とは左大臣の源氏を婿にとるへき事をほめかしたる様に諸抄にせり。然とも三光院（実枝―引用者注）此義を用られず。源氏の座列いはれなき次第なるを左大臣の気色ばみたる也

云々。近年用此説也

とある。左大臣の「けしきばむ」という行為は、諸説が多く採る婿にとる意思をほめかしたという意味ではなく、源氏が無位にも関わらず親王の次席に着いたゆえのいわば怒りの様であるというのが、三光院すなわち三条西実枝の説であるという。その説が公案説であろうと、その息、実枝の説であろうと、内容的には一致し、すくなくとも三条西家の注ということになる。ただ、この注一箇所のみが言及しているということは、三条西家の注、もしくは『岷』に近い書物の説であることをあえて明言したと見ることもできよう。つまり、これも「或抄」が『岷』と直接的な関わりを持つかどうかの材料とはなり得ないと思うのである。

『首書』の特徴は物語本文と注を併せ持つことにある。形式のうえでは、注を本文に対応させるという紙面の制約があり、本文の傍注として主語や人物名を補い、当該本文の真上に対応するように頭注がある。先行注引用の際も、注が長い場合は、「河委」「花委」などの形をとって、続きを省略する場合が多く存し、それはとりもなおさず物語本文との対応の便宜を優先させた結果だと思われる。こうした形式には、源氏初心者に対して読みやすい本文提供しようという配慮が感じられ、本文を読み進めることを最優先にした注釈の付け方であろう。その点において、『首書』全体としての注釈をつける姿勢は、先行注を網羅的に整理しようとした『岷江入楚』よりも、本文に寄り添い、鑑賞しようとした

『湖月抄』の態度により近い。うち、「或抄」の内容には、ひとまず物語の展開をわかりやすく説明し鑑賞する態度を認め得ようが、三条西家の注釈と関わりがあるとまでは断じがたい。

#### 注

- (1) 『首書源氏物語 総論桐壺』片桐洋一氏編(和泉書院 1980)
- (2) 拙稿「『首書源氏物語』桐壺卷頭注の翻刻と小考察(上)——「或抄」の性格に関して——」(梅光学院大学『日本文学研究』第45号 2010)
- (3) 前者は榎本正純氏『首書源氏物語 葵』(和泉書院 1983)解説より、後者は清水婦久子氏「版本『首書源氏物語』の成立と出版(上)(中)(下)」、『青須我波良』55号〜57号・1999〜2002)より、引用した。
- (4) それが一冊の書物なのかどうかはひとまず問わない。「或抄」というときには、「或抄」なる書物が手元にある場合のみならず、書名のない製作途中の本や、手元の講義録を指す場合や、暗に自説を披露するために便宜的に記している場合なども、可能性としてはあるだろう。
- (5) 『岷江入楚』の本文は「源氏物語古註釈叢刊」(底本・国会図書館蔵寛永二十年飛鳥井雅章筆本)を使用し、『万水一露』の本文は「源氏物語古註釈集成」(底本・寛文三年版行の刊本)を使用した。
- (6) 『岷』においては、先行注の引用に肩付を付して出典を明記している。「秘」は、料簡に「三条西ノ抄称名院ノ義也」とあるので、『細流抄』を指すと考えられる。

(7) 注(3)による。

(8) 本文には「きつがひ」と濁点があるが、「きづかひ」の誤りとみる。濁点が一字ずれて付されている例は、特に本文部分に多く見え、またIII番注では濁点がない。

#### 追記

前号において、翻刻に誤りがありました。注番号と、誤↓正の形で示し、訂正します。

- 51 かたく ↓ かたく  
99 三位を貶給事也 ↓ 三位を贈給事也